

岩手医科大学歯学会第18回例会抄録

日時：昭和59年6月30日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部C棟6階講義室

演題1. 咽頭から分離された *Staphylococcus aureus* の薬剤感受性について○高橋 義和, 田近 志保子, 本田 寿子
金子 克

岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座

現在、ブドウ球菌属は16菌種4亜種に分類されており、そのうち *Staphylococcus aureus* は、コアグラゼ産生(+)・マンニト分解性(+)などの性状をもっている。また *S. aureus* は病原性が強く、多くの化膿性疾患の重要な起因菌であり、多剤耐性株検出率の高い菌で、抗生物質の使用においても注意をしなければならぬ菌である。

今回、我々は小児の急性上気道炎患者の咽頭から *S. aureus* 72株を分離・同定し、PCs・CEPs・AGs・CP・TCs・MLs・その他の抗生物質・合成抗菌剤、計30剤に対する薬剤感受性試験を行ったので報告する。

PCG にはほとんどの株が耐性であった。また β -lactamase 産生検査の結果、72株すべてが β -lactamase 産生株であり、PCG耐性機構はペニシラーゼ型 β -lactamase 産生によるものと考えられる。したがって PCG 耐性ブドウ球菌には耐性ブドウ球菌用 PCs が優れた抗菌力を示した。しかし、これら耐性ブドウ球菌用 PCs にも耐性を示す株が10株あり、この耐性株は PCs のほか、CEPs・AGs・TCs・LCM・CLDM にも耐性を示す多剤耐性株であった。また、EM耐性の9株はEMのみの単剤耐性株であった。多剤耐性株10株の耐性機構は β -lactamase の作用のほか、薬剤のPC結合タンパク (PBP) に対する親和性の低下が推測される。

第1世代のCEPsではCEXがやや抗菌力が劣るものの、十分な抗菌力が認められた。また、FOMでは72株すべてが耐性株であり、一方、DOXYにおいては最も強い抗菌力が認められた。

今後、薬剤の耐性機構などについて検討してゆきたい。

演題2. ラット顎下腺の加齢に伴う形態学的変化

○佐島 三重子, 板垣 光信, 對島 壽夫
菊地 博生, 鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

ラット顎下腺は加齢に伴い蛋白濃度、シアル酸、中性糖が減少するがDNA量は変わらないという。最近 Gresik はマウス顎下腺を生化学的、免疫組織学的に検索し、老齢個体ではEGF、NGF、およびProteaseが減少すると報告している。しかし老齢ラットの顎下腺について形態的に詳細に検討した報告は少ない。そこで、私共は雄ラット顎下腺の加齢に伴う変化を光顕的および形態計測により検索した。

材料と方法：動物はSD系ラット雄を用い、young adultの2カ月齢群、adultの4カ月齢群、oldの22カ月齢群を選び各群4匹ずつ検索した。顎下腺は摘出後ただちに重量を測定し、10%中性緩衝ホルマリンにて固定し、パラフィン包埋とした。各実験例とも中心部を通る4 μ 切片を薄切し、ヘマトキシリン・エオジン、PTAH染色を施し鏡検した。組織の計測にはPTAH染色標本を用い、10 \times 10の顕微鏡下で、5mm角の接眼マイクロメーターによって等間隔の点計測法を行った。腺組織を腺房、顆粒管、導管のほか結合組織、神経、血管などの4つの組織成分に分けて検索した。1匹につき500点以上カウントし、腺全体に占めるそれぞれの成分容積を%で現わし、各群の平均値を計算した後、統計処理を行なった。

結果および考察：ラット顎下腺の重さは加齢とともに増えるが、体重も増加するので体重当たりの顎下腺重量は変らなかった。4カ月齢群では2カ月齢に比較してPTAH陽性の顆粒管が増加し、結合組織や血管などその他の組織成分は減少していた。また、22カ月齢群では4カ月齢群に比較して腺房と顆粒管の容積が減少し、その他の組織成分の容積は増加していた。また一部に好酸性で濃縮核を持つ oncocyte 様の細胞がみられた。